まれてガラスが目につきささった。私は思わず自分の目をおさえた。同じ小学生がこんなひどい目にあうなんて。しかも自分の家で。イラクは貧しい国で、病院でもちゃんと治してもらえないから、痛くてもがまんするしかない。勉強も得意なサッカーもできなくなったモハマド君。何不自由なくくらしている私は、だんだんモハマド君にすまない気持ちになり、何もしてあげられないことがくやしくなった。そんなモハマド君を救ったのは、イラクで働く日本人の橋田さんと小川さんだった。二人は日本で目の手術ができるようにしてくれた。私と同じ日本人が、喜んでモハマド君を助けたことをとてもほこらしく思った。日本でも、モハマド君を応えんするための活動が広がった。モハマド君一家は明るさを取りもどした。私は自分のことのようにうれしくて、日本に出発する日をあと一週間、あと二日と、モハマド君といっしょに楽しみに待った。

でも、橋田さんと小川さんが死んでしまった。私は本を閉じた。心ぞうがどきどきした。うそだ。あんないい人たちが死ぬはずがない。頭の中にモハマド君の泣き顔がうかんで、私も泣いてしまった。橋田さんと小川さんも銃でうたれた。うった人に、二人がどんなにやさしくてりっぱな人だったか教えてあげたい。もうめちゃくちゃに人を殺すのはやめてほしい。戦争は人の大切な真心さえも容しゃなくこわしていく。私は、生まれて初めて心から戦争をにくんだ。

橋田さんと小川さんは死んでしまったけど、残されたおくさんや仲間のおかげで、モハマド君は日本で目を治すことができた。みんなとってもつらかったと思う。でも天国の二人が一番喜ぶことをしてあげられてよかった。モハマド君は大人になったら自分の子どもに、ハシダ、オガワと名前をつけたいそうだ。二人にどれだけ感謝しているかよくわかる。でも、イラクに帰ったモハマド君はひどいくらしをしているらしい。彼は大人になるまでぶじ生きていられるだろうか。ほかのイラクの子どもたちはどうなんだろう。みんなを幸せにしてあげることはできないのだろうか。私は今、イラクや世界中から戦争がなくなって、だれもが平和にくらせるようになることを願わずにいられない。

あしたへキックオフ

中川根第一小四年　小林竜翔

ぼくは、中川根町サッカースポーツ少年団に入っています。そして、サッカーが大好きです。だから、この本を図書室で見つけた時、サッカーの物語なのですぐに読みたいと思いました。この本に出てくる主人公は、どのようなサッカーをしているのかなあ、ときょう味が出てきて、自分のサッカーとくらべてみたいと思い、この本を読んでみました。

主人公の健一は、一年生の時からサッカーをやっています。五年生になったばかりのころ、六年生をぬいてベアーズFCのレギュラーに選ばれました。健一は、毎日毎日、日がくれるまで練習していたから、そのど力がみとめられたんだと思いました。試合前のメンバー発表で、自分の名前をよばれた時、健一はすごくうれしかったと思います。ぼくも名前をよばれた時はすごくうれしいし、自分のポジションの役わりをしっかりとはたそうと思います。

健一が六年生になってすぐ、かんとくがかわりました。健一のポジションはフォワードだったけど、新かんとくになってから、フルバックにかえられてしまいました。健一は、一年生の時からフォワードをやっていたのにフルバックにかえられてしまって、とてもくやしいと思うし、かわいそうだと思いました。フォワードはだれもがあこがれるポジションだからです。健一は、自分のサッカーがすべて終わってしまったように落ちこん